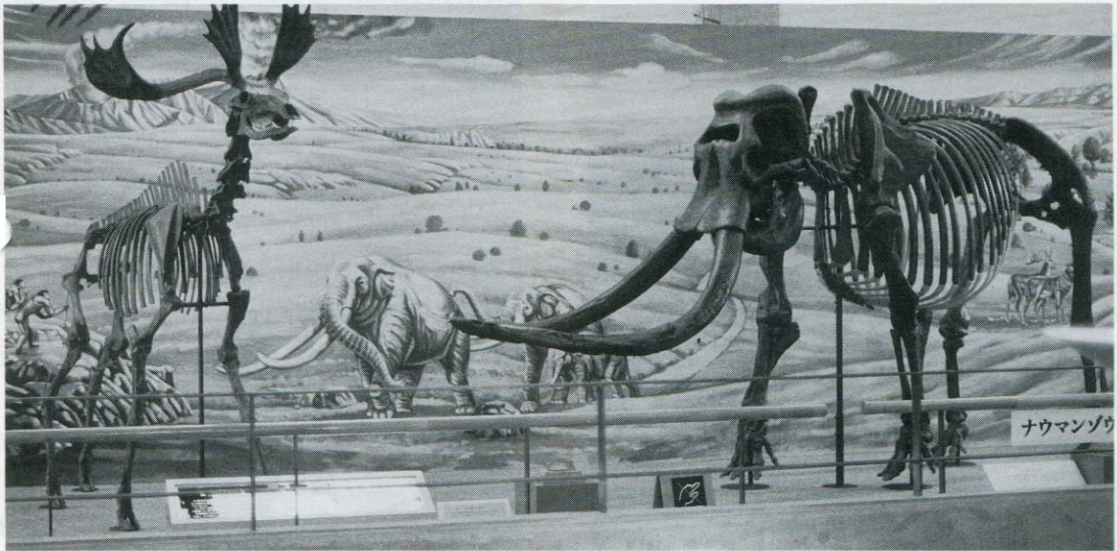


博物館だより

第15号



壁画完成

～ 茶臼山自然史館 ～

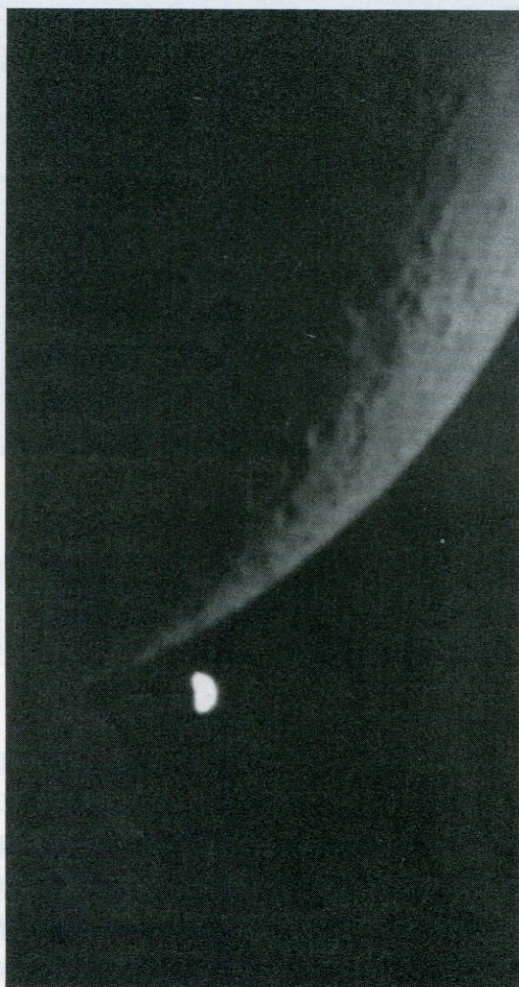
ナウマンゾウ・オオツノシカの大型骨格標本が展示してある第四紀のコーナーの壁画に縦2.5m・横8mの壁画が完成しました。この壁画は『ナウマンゾウの鼻が何故ないの?』という来館者の皆さんの声をもとに、具体的に分かり易い展示をと考えてその当時の様子を復元したもので、火山活動が活発な長野盆地に広がる大草原の中を親子のゾウが歩いている様子や私たち人類の姿などが描かれています。

これからも皆さんの夢や想像を展示に生かせるよう意見や要望をお寄せください。

また、一昨年6月に東部町から産出したステゴドン象の牙(切歯)の化石のクリーニングがこの度終わりました。信州大学理学部地学教室の御指導・御協力のもと、まわりに付いている泥や褐鉄鉱を取り除き、数個の破片に壊れていたものをつなぎ合わせるまでに半年近くかかりました。今後、この牙のレプリカ(複製品)を作り、来年度初めごろに一般公開する予定です。現在、二階の鮮新世のコーナーに仮展示されています。

金星食が見えた

～ 天体観測ノートから ～



▲金星出現

(12月2日18時05分 10cm屈折望遠鏡 焦点距離 800 mm
PJ11mmにて拡大 合成焦点距離7,200mm
フィルム…フジカラースーパーHG400)

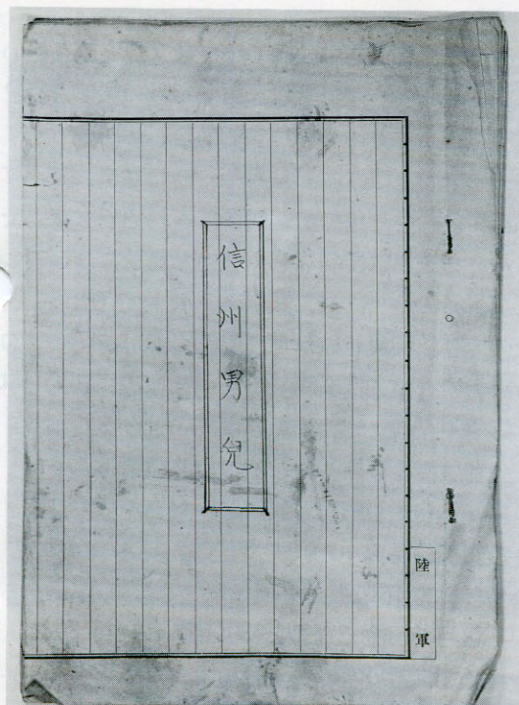
15年ぶり（夜間の現象として）、そして今世紀最後の金星食が12月2日の夕刻に見られました。珍しい天文現象であるため、マスコミもその前後にテレビ、新聞等で報道しました。

星食というのは星が月に隠される現象で、暗い星ではよく起こっています。ところが明るい星の星食となるとめったになく、惑星が隠されるとなるとたいへん珍しい現象になります。そんな惑星食の1つである金星食が実は1989年に2度も起こっています。1回目は7月5日にありましたが、この時は昼前後の現象で、月も月齢2前後の細い月のため、肉眼での観測は不可能な状況でした。そして2回目が12月2日です。この時は日没約15分後に食が始まり（潜入）、食が終わる時（出現）でも月没まで約1時間30分もあって（長野での時間）全過程が条件よく見られました。さらに、金星は最大光輝を間近に控え（12月14日、明るさマイナス4.7等級）しかも三日月に隠されるという最高の御膳立ができていました。もっとも、時間的に良い条件に恵まれたのは日本付近だけで、特に東日本が最良でした。あとは晴れてもらうのを待つだけで、これこそ神頼みということになりました。

当日は博物館前庭に望遠鏡2台、双眼鏡1台、フィールドスコープ3台を設置し、写真撮影と観測（観望？）を行いました。心配した天気は気象台が予報していたくずれが少し遅れたため、当館へ見にこられた3家族10人と取材に来られた2人の新聞記者、そして当館職員は夕焼けが残る快晴の空で素晴らしい現象を最後まで楽しむことができました。潜入が17時10分ごろ、出現が17時57分ごろとほぼ予定通りでした。肉眼、双眼鏡、フィールドスコープ、望遠鏡といろいろな手段で見ると、それぞれが全て味わいがあり、いずれも捨て難いと感じました。特に出現時に肉眼で見た感じは芸術的で月にかけてられたダイヤモンドを連想させてくれて、人間の眼のすばらしさをしみじみと感じさせてくれた金星食です。久しぶりに多くの人達に感動を与えてくれた天文現象といえそうです。

信州男児とは

～ 収蔵資料より ～



“信州男児”という言葉から何を連想されるでしょうか。

当博物館には陸軍の便箋を用いた、“信州男児”と題した9枚綴の寄せ書きが所蔵されています。これは、長野市篠ノ井小松原出身の一兵士が、「満州国間島省琿春」から、激戦地フィリピンへ赴く時に、同郷・信州出身の兵士たちが書き留めたものです。ここには33名の兵士の名が見えますが、そのうち2つを書き出してみました。（原文のまま）

○生れは違へと死に場は同じと固く誓った俺等
ぢゃないか

何故サッパリと、つれて行く事が出来ないの
でせう？ 否皇軍の強い所は此処にありと隊長
殿はニッコリ笑った信州男児の意気高し

○此の三年間父として迎ひで来た隊長殿此こに三歳の春を迎えると共に大命により南方に行かれる…………… 送る身の我等の心境を？残念でなりません…………… 元気で 大東亜の開放に行かれる隊長殿の武運長久をお祈り致します。此の信州健児を代表して南方の征途につく隊長殿万才

両者ともに、信州男児としての武運長久を願っていますが、後者は、前者に比べて、隊長の出勤を悲しんでいることが明らかに読みとれます。この人は、隊長を南方へ送り出す時、どのような顔をしたのでしょうか。

隊長は、フィリピン出勤後間もなく、フィリピン沖で戦死しました。

この隊長の心境はどのようであったかは、わかりませんが、出勤中、懐におさめていた歌集の1ページ目に、次のような英文の詩をのせています。

There the lump shinning bright in a cabin.
In the window its shinning for me. And I
know that my mother is praying for the
boy she is singing to see!

When the lump lighter time in the vally.
Then is dreams I go back to my home.
I can see that old lump in a window.

（原文のまま）

詩の一節を書き留めたものかもしれませんが、歌集の1ページに、郷愁をさそう一文があることからすると、隊長の心はおのずとわかってくるような気がします。ここでは、あえて和訳いたしませんでしたが、任地の兵士の気持ちになって訳してみてください。

この他にも、従軍中の所持品が多く残されています。それは、この兵士が満州を離れる時に、身のまわりのもののほとんどを生家へ送り返したために残ったのでした。再び郷里の土を踏めないことを予感していたのでしょうか。

移り変わる北極星



5月13日(日)まで



ある日、和夫君は公園で小さなスコープを拾います。その夜、家でそれをのぞくと「星に合わせてください」という声がするのです。さっそく和夫君は屋上に向け上がり星に合わせてました。すると、合わせた星の説明をしてくれるではありませんか。和夫君は便利なものを拾ったと大喜びでしたが、そのうち、スコープは、クイズを出してきたのです。和夫君は答えを間違えてしまい、スコープの中へ引き込まれてしまいました。和夫君は、そこで不思議な体験をすることになります。

今回は春の星座と移り変わる北極星の話です。

○投影日…土曜日・日曜日・祝休日

○投影開始時刻…10:00 11:30 13:30 15:00

○春休み特別投影

3月23日(金)・27日(火)～30日(金)には、13:30と15:00に特別投影します。

調査に御協力を

現在、長野市立博物館では、養蚕・製糸業に関する資料を調査・収集しています。

明治以来、六工社を中心として、信州の製糸は世界的に有名でした。しかし、近年ではそうした面影はどこにも見られなくなりました。そのため、養蚕・製糸業についての歴史資料、具体的には、農家の日記・製糸工場の帳簿や手紙類を調査しています。もしお持ちの方は博物館まで御一報ください。秘密等は厳守いたします。近代の長野が歩んだ歴史を未来に伝えるため、多くの皆様の御協力をお願いいたします。



博物館だより No.15 1990.2.28

編集・発行 長野市立博物館

〒381-22 長野市小島田町八幡原史跡公園内

☎ (0262) 84-9011